キリスト教思想研究入門 6/1/2009

S.Ashina

＜前回＞シュライアマハー神学の意義

１．近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父

２．啓蒙思想とロマン主義の総合

３．解釈学・弁証法・倫理学、体系家→信仰論（『信仰論』(Glaubenslehre)）

Dogmatik から Glaubenslehre へ

自由主義神学

４.『宗教論』の信仰概念

意図：宗教の独自性（宗教批判への応答）―宗教学の基礎、宗教哲学（宗教本質論）

宗教多元性の問題（第五講）

５．形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」(「本質－現象」の枠)

５．　宗教批判の諸類型

（1）フォイエルバッハ

1. 現代キリスト教を規定する問いとしてのフォイエルバッハ問題

フォイエルバッハの宗教批判は避けて通れない

源泉は古代ギリシアの哲学的神話批判→マルクス、ニーチェ、フロイト、キルケゴール

人間が想像した神・神人同型論

2. フォイエルバッハの宗教批判の二つの前提

①人間の類的本質の無限性

②類的本質の外化（＝表現、疎外、投影）

3.「宗教は動物に対する人間の本質的な区別に基づいている ── 動物は宗教を持たない」

個体としての自分や他者の意識＋類的存在としての人間（人間性）の意識

4. 人間の本質あるいは類（あるいはいわゆる人間性）：理性、意志、心情

5. 類としての理性そのもの（種あるいは類としての人類）の無限性

6. 人間は自らの活動を通して自己を自分自身から区別された客体として措定する（外化あるいは疎外）→「対象の意識は人間の自己意識であり」、「対象は人間のあらわな本質であり、人間の真実にして客観的な自我である」

7. ヘーゲルの意識論：「主観的精神→客観的精神→絶対精神」

8. 知識社会学：外化（表現・創造）→客体化（制度化・実体化）→内化（社会化・自己同一性）

9.「他者は私の汝であり……私の他なる自我である。それは私にとって対象化された人間、私の顕わにされた内面である。すなわち他者は自分自身を見る目である。私は他者においてはじめて人間性の意識をもつ。他者を通してはじめて、私は私が人間であることを経験し感じるのである」

10.「宗教は無限者の意識である。したがって宗教は人間が自らの無限の本質についても

つ意識であり、かつそれ以外の何ものでも在り得ない」。「神の意識は人間の自己意識であり、神認識は人間の自己認識である」

11.「神は人間の鏡である」、「神学の秘密は人間学である」

12.宗教：人間の本質を人間の外に存在する超越的なもの（＝神）として措定→偶像崇拝「神を富ませるために、人間は貧しくならねばならない」、「神が主体的であればあるほど、人間はよりいっそう自分の主体性を疎外する」

13.哲学の課題：このような神と人間の対立が類的本質としての人間と個人としての人間の対立であることを暴露することであり、人間から疎外された人間性を人間の側に取り戻すことなのである

14. ①フォイエルバッハによって批判された神

人間の無限の類的本質が人間と対立するものとして人間の外に投影されたもの

→人間は無限な自らの本体的人間性の実現を妨げられる、人間のエゴイスティクな幸福衝動の素朴な実体化

最高存在あるいは最高価値として措定された神（形而上学的存在者としての神）

バルト「フォイエルバッハの鋭い感覚は正しい」

②人間の類的本質の無限性の根拠

「個別的には人間の力は制限されているが、結合されると無限の力となる。個々人の知は制限されているが、理性は制限されておらず、学も制限されていない。なぜなら、それは人類の共同行為だからである」

→近代人の「信仰」（無限の進歩）＝楽観主義・ヒューマニズム

③現代の宗教的神学的思想は人間の疎外の克服、人間の本来的可能性の実現についてどのように考え、どのように答えているのか

→「投影のメカニズム＝人間の本性」ならば、フィクション機能の積極的意味こそが問われるべきである（ユートピア精神の意義）

④フォイルバッハの宗教批判→マルクス的な無神論的な宗教批判（非宗教的宗教批判）

→キルケゴール的な有神論的な宗教批判（宗教的宗教批判）

（２）マルクス

15. 人間社会に宗教が生じたのは単なる偶然ではない。宗教は欲求の疎外形態における実現（否定的な媒体）であり、人間の現実生活の一契機なのである。

・唯物史観：生産力と生産関係の矛盾の弁証法的展開

・上部構造と下部構造

・個人と共同体

16. 宗教批判と政治社会批判とは密接に関連

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にもう終わっている。そして、宗教の批判は、あらゆる批判の前提である。天上の批判は、こうして地上の批判にかわり、宗教の批判は法の批判に、神学の批判は政治の批判にかわる」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）

・フォイエルバッハの議論の歴史的実質化

17. 宗教は人間社会の歴史において必然的に生じたものであるが、その歴史的条件が変化するとき、必然的に終焉を迎えるはずである。

・積極的批判と自動的消滅待望
・宗教はアヘンである

18. 宗教を不可欠の契機として含まないような現実世界の構築

共産主義社会：非疎外形態における欲求・類的本質の実現→これ自体がユートピアか？
無階級社会
自己止揚・自己否定の契機をマルクス主義は内部に組み込んでいるか？

19. フランクフルト学派における宗教論

教条的マルクス理解を超えて。若きマルクスと精神分析。
ホルクハイマー、アドルノ、フロム
マーティン・ジェイ『弁証法的構想力――フランクフルト学派と社会研究所の歴史　1923-1950』みすず書房。

＜ヨハネ黙示論２１章＞

22　わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが神殿だからである。23　この都には、それを照らす太陽も月も、必要ではない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。

（３）フロイト

5/28 の概論講義にて

＜参考文献＞

1. フォイエルバッハ　『キリスト教の本質』岩波文庫。
2. 松丸壽雄　「宗教批判の行方」（大峰編　『神と無』）ミネルヴァ書房。
3. パネンベルク　「無神論の諸類型とその神学的意義」（『組織神学の根本問題』）日本基督教団出版局。
『人間学』教文館。
4. レーヴィット　『ヘーゲルからニーチェへ』岩波書店。
5. 半田秀男　『理性と認識衝動－初期フォイエルバッハ研究－』溪水社。
6. 深井智朗　『アポロゲティークと終末論　近代におけるキリスト教批判とその諸問題』北樹出版。
7. 都留重人　『マルクス』講談社。
8. 津田雅夫　『マルクスの宗教批判』柏書房。
9. ティリッヒのマルクス論　『ティリッヒ著作集　第１、１０巻』白水社。